

も含まれる。本書の冒頭で触れられたムスタファー国際大学の日本校開設はこうした一連の留学生教育の制度改革の最新の結果であり、同校はムスリムがマイノリティの地域を含め世界各地に分校や協定校をもつ。もちろん世界各地で展開する背景には、「親シア派的な環境を育成し、反シア派の立場をけん制すること」などイスラーム内部の政治的な思惑もある。では、イランへの宗教留学の経験は、留学生の帰国後のキャリアパスにどのように影響しているのだろうか。その実態について、パキスタン、インドネシア、そしてタイでの臨地調査を事例に検討されているのが第5章である。

ところで、本書を通読した読者としては題名にあるイランの宗教戦略、留学生について十分に理解できた一方で、グローバル化については釈然としないのではないだろうか。国際化や多国的展開ではなく、敢えてグローバル化した理由は、今後の著者の研究の方向性の表明であるのだろうかと評者は考えている。今後の展望で語られたように一連の宗教教育制度改革は、グローバル化が本格化していくポスト冷戦期に始まった。イランの宗教戦略がグローバル化という新たな世界の在り方と如何に結びついてきたのか、一人の読者として更なる研究成果の公開が待ち遠しいところである。

(黒田 賢治 広島大学大学院総合科学研究科研究員)

Bano, Masooda and Keiko Sakurai (eds.), 2015. *Shaping Global Islamic Discourses: The Role of al-Azhar, al-Medina, and al-Mustafa (Exploring Muslim Contexts)*. Edinburgh: Edinburgh University Press. vii+256pp.

イスラームが世界宗教としてグローバルな性質を有していること、知識や教育を重視し、近代以前から学位制度を発達させてきたことはよく知られている。しかし、それとはまったく次元の異なる水準において、近年のグローバル化と連関しながら、イスラームに関わる有形・無形の様々な資本の移動や拡大、近代的なイスラーム教育の整備が急速に進展している。そのことはイスラーム世界全体の思想的動向だけでなく、世界におけるイスラームの位置づけにも大きな影響を与えているといえる。そうした状況下で、イスラームの国際化を目指す高等教育機関の登場に焦点をあてた本書の出版は、きわめて時宜にかなっている。

本書は、2012年8月にオックスフォード大学で開催されたワークショップの成果として編纂された論文集である。全8本の論文が収録されており、いずれの論文も、修学の中核地とみなされている場から周辺地域にむけてどのように思想が伝えられるか、それらの思想の受容が、当地の複雑な社会・経済・政治的な文脈にいかんにか左右されるかという問題意識に基づいている。

これをうけて、本書は宗教的メッセージの発信と受容のポリティクスの研究対象として、世界の各地から留学生を集める修学の中心であると同時に、思想のグローバルな発信を試みる主体である、国際的なイスラーム大学に着目している。具体的には、カイロのアズハル大学、1961年に設立されたサウディアラビアのマディーナ・イスラーム大学、イラン・コム・ムスタファー国際大学が研究対象としてとりあげられる。特に、上記の3大学が、大学の教師と学生、国家と大学の運営部門、学生の出身国というそれぞれの関係領域において、重要な相互作用 (critical interaction) の基礎としてどのように作用しているか明らかにすることを試みている。

宗教的言説を発信・受容する過程の中心としての教導組織や教育機関に着目した先行研究は、[Hefner and Zaman 2007]をはじめとして充実した状態にある。一方、知的権威の構造の変容という観点から研究史をたどると、従来のモスク・マドラサ型の学習のオルタナティヴとしての国際的なイスラーム大学に関する研究は、決して多いとはいえないと編者であるバノと桜井は指摘する。また、これらの国際的なイスラーム大学は、近代的な教育機関との併存関係、設置者である国との直接／間接的な関係性などの点で、従来の教育施設とは性格を異にする。3つのイスラーム大学の教育戦略や卒業生の進路を比較研究の場に置くことによって、本書の読者は、スンナ派・シア派という両宗派の競合がもたらすダイナミクスも含めて、宗教的言説の発信と受容のポリティクスについて、普遍性と地域固有性の双方の観点から、横断的に理解することが可能になっている。

国際的な大学は、多くの留学生を引きつけることを主要な特徴としており、大学側も留学生獲得に向けた

国際戦略を日々推進している。しかし、学習の中核地であることを決定づける重要な要素として、自らのアイデンティティの発信にむけた3大学の努力だけでなく、学習の中核地としての国際大学の地位を認知する、いわゆる「周縁部」の願望がもたらす作用があることを編者は指摘する。

本書は三部構成となっており、具体的な章構成は以下のとおりである。

序論

第一部 グローバルなものの創出——3大学の内部

1. マイク・ファーカー「1961年設立のマディーナ・イスラーム大学——宗教的伝道のポリティクスと近代的なサラフィー主義教育法の創出」
2. 桜井啓子「シーア派教学の中心としてのコム形成——ムスタファー国際大学」
3. マスード・バノ「中道派的イスラームの護持者——カイロのアズハル大学」

第二部 帰郷した卒業生とローカルなものの交渉過程

4. アレックス・サーストン「『アフルスンナ』——カノとマディーナを往還する伝道ネットワーク」
5. ズルキフリー「インドネシアにおけるコム卒業生——シーア派コミュニティにおける役割」
6. アン・ワインスコット「イスラーム近代主義、政治改革、教育のアラビア語化——モロッコ人ナショナリストとアズハル大学の関係性」

第三部 帰郷した卒業生とローカルなものの変容

7. 塩崎悠輝「マッカからカイロまで——東南アジアにおけるファトワーがもつ影響の変容」
8. 久志本裕子「マレーシアにおけるウラマー養成の『アズハル化』」

第一部は、3つの国際大学が影響力を拡大するために採用している戦略を検討している。ファーカー論文は、サウディアラビア政府の伝道プロジェクトとして1961年に開設されたマディーナ・イスラーム大学の誕生と発展を、同国の政治的発展過程の中に位置づけるとともに、大学と学生の関係性のダイナミクスを論じたものである。教育訓練の技術や官僚的な組織構造、有形・無形の資本分配などによって形成される、サウディ系—非サウディ系アクター間の「不均衡な相互関係(unequal reciprocity)」を通じた変容能力が、マディーナ・イスラーム大学の発展の核心にあることをファーカーは論じている。同大学は、ワッハーブ主義に基づく伝道プロジェクトというアイデンティティを一貫して維持しながら、大学—学生間の権力関係に加えて、国外出身の教授陣などの世界中のアクターとの対話的な関係を通じて、その教育内容や方法論を変容させてきた。

桜井論文では、ムスタファー国際大学とその前身組織の教導戦略を扱っている。ムスタファー国際大学では、留学生の利益に資するという想定のもと、異なるカリキュラムに基づくイラン系学生と非イラン人学生の分離政策が採用された。しかし、分離政策はかえって非イラン人学生の疎外や教育機会の限定を招き、彼らをシーア派ヒエラルキーにおいて「ムカッリド」の地位に留めることになった。近年、コムの教育様式の過度な政治化やイラン化に反発して、アラブ・シーアを中心としてイラクのナジャフが復権しつつある事実を著者は指摘し、ムスタファー国際大学の拡大はスンナ派—シーア派およびシーア派内部の両方面で競合をもたらしたと結論づけている。

バノ論文は、四大法学派すべての学習や大学内の多様な思想傾向の維持が、「中道的なイスラーム(al-Wasatiyya Islam)」の護持者というアズハル大学のアイデンティティの中核をなしていること、中道的なイスラームを追求する姿勢そのものが、アズハルに対するグローバルな支持の要因となっていることを明らかにした。さらに、エジプト内外の様々なアクターから中道的なイスラームを代表する存在とみなされることを通じて、アズハルが政教関係においてどのような役割を果たしているかを、アラブの春と関連づけて論じている。

第二部は、国際イスラーム大学から発せられた思想が、卒業生を通じて各地域に伝播する過程に焦点をあてている。

サーストン論文は、マディーナ・イスラーム大学を修了したナイジェリアのサラフィー主義組織「アフルッスンナ」の指導者らが、サウディアラビアでの修学経験をいかに自らの活動に反映しているのか、カノでどのような伝道を行い成功につなげたのかを論じている。同論文によると、アフルッスンナのメンバーは、サラフィー主義的な知識と方法論に精通し、マディーナ・イスラーム大学の修学経験とサウディ系学者の権威を動員することによって、他の急進的サラフィー主義組織に対抗しうる広い支持を集めることに成功した。ズルキフリー論文は、コムで修学したインドネシア人学生のアソシエーションに着目し、インドネシアにおける伝道と教育の分野で彼らが果たしている役割を分析する。留学を終えたインドネシア人学生は、コムの教育方式を援用したり、ムスタファー国際大学の海外支部と関係したりしながら伝道教育に従事しており、イランとインドネシアにおけるシーア派コミュニティの仲介者としての役割を果たしている。ワインスコット論文は、モロッコにおけるアズハル出身者とその弟子たちによるイスラーム近代主義の展開をとりあげ、ローカルな要因がイデオロギーの拡散に与える影響を検討している。ムハンマド・アブドゥフの改革思想は、教育政策を中心として、現在に至るまでモロッコのナショナリスト政党「イスティクラール党」の綱領の基盤となっている。19世紀後半から20世紀初頭にかけて、サヌーシーをはじめとするアズハル出身者が提唱したイスラーム近代主義は、当時のモロッコにおける政治・社会的要因により、広く受容されることがなかった。しかし、フランスによる植民地化の進行は、政治・社会的改革を希求する運動の基礎として、後代になってイスラーム近代主義をモロッコに根づかせる事態をもたらした。モロッコにおけるナショナリストの事例は、イデオロギーの拡散が、卒業生の活動や戦略以上に、母国のコミュニティにおける権力関係と深い相互関係を持つことを示している。

第三部は、宗教的言説やアジェンダの展開が、伝道にともなう熱意や効率性だけでなく、政治状況や政教関係、既存の宗教的エリートの存在をはじめとする現地のコンテクストに左右されること論じている。塩崎論文は、知的影響力の発信地がマッカからアズハルを擁するカイロに移行したことが、東南アジアのムスリム・コミュニティにおけるシャリーア解釈やファトワー発行に対して大きな影響をもたらしたことを、一次資料に基づいて明らかにしている。20世紀初頭に東南アジアの状況に対応しうるファトワーの需要が高まり、ファトワーを求めるオルタナティブとして、ワッハーブ派が勃興したサウディアラビアに代わって、マナール派に代表される知的サラフィー主義を推進するカイロが登場した。さらに、マレーシア政府が国内にファトワー発行機関を創設したことにより、国内の状況に適合したイスラーム法学が発展したが、弾力的なサラフィー主義的方法論の運用がこれに資したことを塩崎は論じている。久志本論文は、アズハルのグローバルな影響と現地での展開の事例としてマレーシアをとりあげる。アズハルの近代的組織への改編とマレー・ムスリムの教育的機会の欠如という2つの要素は、高度な宗教的知識を求めるマレー人学生にとって、長きにわたりアズハル留学を魅力的な選択肢としてきた。70年代以降、マレーシア政府のイスラーム化政策を通じて、国家のウラマー統制と表裏一体に、アズハル式のカリキュラムや認証制度を導入した近代的教育制度の整備が進んだ。近代的なイスラーム教育の整備、国内での教育的機会の充実、卒業生数の増加にともなって、近年アズハル卒業生の地位は下降しつつある。マレーシアにおけるアズハルの影響は、イデオロギーや政治的側面よりも、中等教育を中心とする制度的側面において機能している。

本書に収められた事例研究は、それぞれの大学を擁する各国の政策や、大学の推進する国際戦略のみならず、そこで学ぶ留学生の動機や修学後の進路などのナラティブを丁寧に追っており、読者は宗教的メッセージの発信と受容過程のダイナミクスを追うことが可能になっている。

以下で、中道派のイスラーム思想を研究対象とする書評者の関心から、本書に関する考察を行いたい。本書の事例研究では、マッカ、カイロ、コムから宗教的言説や思想、方法論が拡散するにあたって、思想を受容する地域固有の状況に柔軟に対応しうるものが生き残るという事実が繰り返し示されている。また、本書に収められた論文の多くが、知的なサラフィー主義や中道的なイスラーム思想が、国際的なイスラーム大学の教育に裏づけられて拡散し、植民地支配や急進派運動との競合、他宗派・他宗教との関係性をはじめとする現地の事情に応じて動員される過程を描いている。

書評者はエジプトにおける知識人の独立した潮流であるイスラーム中道派の思想と活動を専門としている。かつてアイケルマンとビスカトーリが現代のムスリム政治の特徴のひとつを「権威の断片化」と喝破したことを想起させるが[Eickelman and Piscatori 1996]、1980年代以降のエジプトでは、中道的なイスラーム

を提唱する非アズハル系の知識人や説教師が言論活動を活発にしている。その一方で、バノ論文が指摘したように、アズハルは中道的なイスラーム言説を発する正統な主体として、現在に至るまで極めて権威ある地位を保っている。宗教的権威の枠外からの様々な異議申立てを可能にしたテレビやインターネットなどのメディアの発展は、従来の宗教的権威であるアズハル出身の人物にも、同様の思想的発信の機会を与えている。それに対して、興味深いことにイランとサウディアラビアの事例は、思想のグローバル化を目指しながらも、発信される内容やそれに伴う様式が、結果として国益やナショナルな枠組みに奉仕するかたちで収束していくという矛盾を示している。また、編者らは、アズハルとマディーナのサラフィー主義が、クルアーンとハディースを直接参照することとともに立脚しながらも、実践においてまったく異なる神学的・社会的含意をもたらすことを序論で指摘している。

本書は、思想発信を行う宗教的権威としての教育機関が、いかに他者からのまなざしや願望によって形成され、そこで学ぶ学生や卒業生を含めた他者や教育機関自身によって動員されるかを、教育機関内外でのアクター間の権力関係を示唆しながら明らかにした。この国際的な機関がもつ権威は、きわめて流動的なものであると同時に、多くの人びとを巻き込んで形成されるという点で強固なものとなりうる。

教育機関に軸を据え、宗教的言説のグローバルな発信と受容のポリティクスを扱った本書ではほとんど触れられてこなかったが、過激派イデオロギーの越境的拡大が再び顕著となった今日に本書が出版されたことは、きわめて重要な意味を有している。

過激派の言説に比して、穏健および中道的なイスラーム言説の拡大・受容過程を追うことには大きな困難が伴う。中道的なイスラーム言説が、内的な多様性を是認し、「過激でない」ことを特徴とするものであるゆえに、「何を以て中道とするのか」を定義し、把握することが困難だからである。しかし本書では、中道的なイスラームを促進するアズハル系ウラマーや、それに魅力を感じ積極的に受容しようとする留学生の姿を示すことによって、把握しがたいコンテンツの多様性と柔軟性にこそ中道派の拡大要因が表れることを示唆している。

1970-90年代に、過激派に対抗するファトワーを積極的に発行したアズハルの事例が示しているように[Skovgaard-Petersen 1997; Moustafa 2000]、ある宗教的言説が受容されるかどうかは、過激派に属する人々よりむしろ、一般大衆がそれに耳を傾け、権威あるものとして是認するかどうかという点に左右される。急進派に対抗する宗教的言説の必要性が高まるイスラーム世界の現状にあって、国際的な教育機関によって権威づけられた中道派言説や知的サラフィー主義が、草の根的な拡大を続けていることを示した本書の意義は大きい。

<参考文献>

- Eickelman, Dale F. and James Piscatori. 1996. *Muslim Politics*. Princeton: Princeton University Press.
- Hefner, Robert W. and Muhammad Qasim Zaman, eds. 2007. *Schooling Islam: the Culture and Politics of Modern Muslim Education*. Princeton: Princeton University Press.
- Moustafa, Tamir. 2000. "Conflict and Cooperation between the State and Religious Institutions in Contemporary Egypt." *International Journal of Middle East Studies* 32(1), pp. 3-22.
- Skovgaard-Petersen, Jakob. 1997. *Defining Islam for the Egyptian State: Muftis and Fatwas of the Dār al-Ifṭā*. Leiden: Brill.

（黒田 彩加 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科）

ロジャー・オーウェン（著）山尾大・溝淵正季（訳）『現代中東の国家・権力・政治』明石書店 2015年 470頁

日本語で読むことのできる中東政治の教科書に新しいラインナップが加わった。本書は Roger Owen, *State, Power and Politics in the Making of the Modern Middle East*, 3rd ed. (Routledge, 2004) の翻訳書である。同